

大学経営政策研究

第7号 (2017年3月発行) : 105-120

韓国における大学によるプログラム留学

—学生移動の実態分析から—

張

燕

韓国における大学によるプログラム留学

—学生移動の実態分析から—

張

燕*

The Realities of International Students' Mobility for Credits in Korea:

An Analysis of the Institutional Sector of Korean Universities as a
Mezzo Level

Yan ZHANG

The study of international students' mobility is one of the popular topics in higher education. Many studies focus on international students' mobility for obtaining a degree. But, few studies focus on international students' mobility for gaining credits. This paper aims to clarify the reality of international students' mobility for credits in Korean universities.

International students' mobility in Korean universities can be divided into three university types. It is thought that each of these university types has a different management policy on international students' mobility for credits. Because each of these university has different global or regional linkages and networks.

And then, in this paper, these universities' behavior are classified into four patterns to analyze.

There is also a tendency for international students' mobility to occur within East Asia. Universities in this region are not large and are located in rural areas. However, no research was conducted with these universities. Therefore, this paper concludes and suggests that these universities form the subject of future case study research to clarify their management behavior.

1 問題の所在

OECDの統計（Education at a Glance2015）によると、世界での留学生数は1975年に80万人だったが、1990年には130万人に昇り、2000年には210万人、2010年には420万人になった。1990

* 東京大学大学院教育学研究科 博士課程

年、2000年、2010年を基準に、10年ごとのデータを見ると、2000年まで2倍弱増加し、2010年には2倍増加した。世界での留学生数は1990年以降、特に2000年以降急激に増加している。

留学生という一般的なには学位取得を目的とした学生移動（Student Mobility）を連想する。学位取得を目的とする学生移動は、時間と金銭面でのコストがかかり、富裕層の特権或いは国レベルの奨学金をもらえる少数のエリートしか享受できない特権であった。しかし、18歳人口の減少、高等教育の市場化、大学の国際化などの世界での高等教育状況の変化の総合的な作用により、留学がますます容易になり、留学生の定義、留学目的、留学方式、留学期間などが多様化してきた。このような多様化している留学生の中には、学位取得を目的としている学生だけではなく、単位認定を目的とした学生もいる。単位認定を目的とした国境を越えた学生移動は、最初にヨーロッパ域内でのエラスムス計画で取り入れた。ヨーロッパでは、ECTS（European Credit Transfer and Accumulation System、ヨーロッパ単位互換制度）を確立し、国境を越えた学生移動の質を評価する制度として取り入れた。単位認定制度の確立は、学生たちがある程度教育の質を保ちながら、より気軽に移動することを促進したと考えられる。しかし、国を分析単位とした学生移動の研究は山ほど積み重なってきたが、大学を分析単位としたメゾレベルの学生移動は実態すら明らかになってない。これが筆者の問題関心である。

一般的に言われている留学生の移動と区別するために、本研究では「プログラム留学」という概念を取り入れる。プログラム留学とは、大学間の協定によって教育課程が有機的に在学大学の教育の一部として取り込まれた形を取り、単位認定を目的とした大学間学生移動をいう。ダブルディグリー、ジョイントディグリーなどの学位取得を目的としたプログラム留学は制度面で曖昧なところが多いため、本研究では除外した。

2 先行研究と課題設定

2.1 先行研究

世界での留学生の数が増え、留学生に関する研究は数多く行われてきた。Mazzarol, T. (2001)のレビューによると、2000年までの研究は、留学生を対象とした国レベルの要因分析が主流だった。Lee (2006)の留学生移動に関する研究のレビューによると、留学生の移動はグローバル的な経済状況と大きく関わっていると主張している。しかし、どちらも国レベルのマクロ的な動向であり、大学を分析単位とし、単位認定を目的とした学生移動を分析した研究ではなかった。このように直接関係のある先行研究が見当たらなかったが、Lee (1966)の「A Theory of Migration」という移民研究の理論から分析の枠組みの手掛かりをみつけた。Lee (1966)は、人の移動する現象を考察するには、(1)本国の要因、(2)移動先国の要因、(3)阻害要因、(4)個人要因、といった四つの要因を考察する必要があると指摘した。この理論は国を研究単位とした理論であるが、これを大学を研究単位とした研究に落としてみると、(1)本大学、(2)相手先大学、(3)阻害要因、(4)個人要因を考察することができる。従って、本研究では、韓国の大学を分析単位としたメゾレベルでの(1)韓国の大学の学生移動の実態、(2)相手先大学との交流パターンを明らかにすることを目的とした。また、韓国の大学と相手先大学との交流を見るには、総数（flow）だけでなく、送出し（out going）と受入

れ (in coming) をそれぞれ考察する必要がある。(3)阻害要因、と(4)個人要因は、別の論文になるため、本研究では除外した。

留学生が全世界で増えただけでなく、世界では、国境を越えた国際的なフレームワーク作りが行われている。ヨーロッパでは、1987年からエラスムス計画 (ERASMUS, European Region Action Scheme for the Mobility of University Students) によってEUにおける学生の流動化の促進を目指した (木戸 2005)。そして、学生移動の際に、学習成果を認めるための単位認定制度、すなわち ECTS (European Credit Transfer System、ヨーロッパ単位互換制度) が確立した。その後、ヨーロッパでは、ポローニャ・プロセスの定める各学位サイクルについて、学習プログラムを (再) 設計・開発・実践・評価する方法を示すものである欧州教育制度のチューニングという共通枠組みを作った (深堀 2014)。また、経済協力開発機構 (OECD) で大学教育の成果を世界共通のテストを用いて測定することを目的とする国際事業である高等教育における学習成果調査 (Assessment of Higher Education Learning Outcomes, AHELO) も国境を越えた国際的なフレームワーク作りの一つである。国境を越えた国際的な枠組みはいよいよ制度だけでなく、教育現場まで浸透しつつある。

ヨーロッパだけでなく、アジアでもそのようなフレームワークが作られている (杉村・黒田 2009、杉村 2007、黒田 2011)。たとえばアジア太平洋大学交流機構 (UMAP、University Mobility in Asia and the Pacific) で確立した UCTS (UMAP Credit Transfer Scheme) 制度である。環太平洋地域と国の大学による学生移動を促進する狙いで作られたが、言語面での問題や高等教育機関の質の格差が大きく、ヨーロッパのように進まず、UMAPの機能や特徴を生かしたプログラム展開は十分には実践されていない (芦沢 2016)。その後、東南アジアでは、2015年12月に東南アジア諸国連合 (ASEAN) はASEAN共同体 (ASEAN Community) を立ち上げ、域内の経済、政治・安全保障、社会文化の諸側面で統合しようとするフレーム作りがはじまった。東アジアでは、2009年に北京で開かれた第2回日中韓サミットにおいて、鳩山内閣総理大臣 (当時) が質の高い大学間交流を提案した事を発端とし、2010年4月に日中韓の3カ国の政府・大学・産業界関係者による「日中韓大学間交流・連携推進会議」が発足した。その会議で、Campus Asia (Collective Action for mobility Program of University Students in Asia) が議論され、日中韓3カ国政府が共同で進める大学間交流のパイロットプログラムが2011年の秋に開始し、5年間の実施が予定された。Campus Asiaは政府レベルの各国のエリート大学学生移動で、大学院レベルの学位取得を目的としたプログラムであり、学士課程レベルの単位認定を目的とした学生移動の状況はわからない。日中韓の大学における研究志向のエリート大学においては有用であるが、それ以外の大学は大学院より学部レベルの段階がより重要であり、学位取得を目的とした学生移動より、単位認定を目的とした学生移動がより現実的な選択肢であると考えられる。このように、国境を越えた国際的なフレームワーク作りは進んでいるが、その学生移動の実態は明らかにされていない。北村 (2016) も欧州やアジアでは高等教育の域内連携 (さらには地域間連携) を進めることで、学生たちの流動性を高めようとしていると指摘した。特に、東アジア域内ではCampus Asiaの試みはあり、政府主導のプログラム或いは少数の有名大学同士の交流の事例などはあるが、研究を中心に、大学院レベルの学生交流に傾き、学部を対象とした大学レベルの大学による学生移動の全体的な実態は明らかではない。

近年、東アジアでは、国立大学の法人化、民営化が進み、大学各自の行動が異なってきた。そのため、大学レベルの機関分析をする必要性が出てきた。両角（2011）は、日本の大学における国際交流の状況を分析し、個別校の方針が交流実績に直結すると指摘した。そのような大学の方針は、大学の属性に関わる可能性が高い。その属性として、立地（場所）、規模（学生数）、大学のタイプ（階層）があげられる。このように、地域的なフレームワーク作りが行われていることを考察し、本研究では、韓国、中国、日本を含む東アジアを一つの地域とし、韓国の大学における東アジア域内外での学生移動の実態を明らかにすることも念頭においた。

韓国では大学を分析単位とし、単位認定を目的とした学生移動にどれぐらいの研究が行われているのか。韓国では、大学の国際化、留学生に関する研究に着目して行われてきた（韓国教育開発院調査報告書 2004、韓国教育開発院調査報告書 2012）。韓国教育開発院調査報告書2004では、韓国の大学の国際化の現況を調査した。190校の四年制大学の分析を通じて、学生交流面で、①学生交流に参加した学生の比率が低いこと、②一部の大学以外に学生交流実績が少ないこと、③約半数の大学では学生交流が行われておらず、正規の外国人留学生が居る大学は約30%であった。この研究では、韓国の学生移動の一部の現状は指摘しているが、相手大学との交流状況が言及されてなく、地域的なフレームワーク作りは分析してなかった。

それ以外に、韓国大学教育協議会（1997）は大学間交流について、許（1997）は個別大学の国際化の研究の一環として学生交流の実態を分析し、朴（1997）は海外の事例を踏まえ、韓国のいくつかの大学の事例を取り上げて研究を行った。また、日韓比較の視点により英語プログラムに着目して大学間の学生移動の実態を分析した嶋内（2016）の研究などもある。このように、日本では『留学交流』で多くの事例研究が紹介された（張 2012）ことに比べ、韓国では事例研究が少なかった。

要するに、韓国において、大学を分析単位とし、単位認定を目的としたメゾレベルの学生移動の実態を明らかにする必要があると考えられる。

2.2 研究目的、課題設定

本研究では、韓国における単位認定を目的とした大学を分析単位とし、(1)韓国の大学での学生移動の実態、(2)相手先大学との交流パターンを明らかにすることを目的とした。韓国の大学での学生移動の状況を分析する際に、東アジア域内外での学生移動の状況も念頭において考察した。また、立地（場所）、規模（学生数）、大学のタイプ（階層）を基本的な軸として用いた。そして、大学による単位認定を目的とした学生移動は、送出し（out going）と受入れ（in coming）の二つの側面を持ち、この二つの側面を足したのが学生移動総数（Flow）である。

そして、下記のように、研究目的(1)を①②③の三つの分析課題に設定し、研究目的(2)を分析課題④に設定した。

- ① 大学の属性によって学生移動総数（Flow）はどのように違うのか。（3 節）
- ② 学生移動総数（Flow）の中身、すなわち送り出しと受入れの関係はどのようにになっているのか。（4 節）
- ③ 学生移動総数（Flow）は、どのような地域（東アジア域内か否か）に集中しているのか。（5 節）

④ 韓国の大学と学生移動が行われている相手大学との交流パターンはどのようになっているのか。(6節)

2.3 使用データ

本研究では、2010年の四年制大学の学部を基準に韓国大学情報公開サイト(대학알리미, <http://www.academyinfo.go.kr>)から「外国大学との交流現況(외국대학과교류현황)」という項目にアップロードされている送り出し(out flow)と受入れ(in flow)の実績データを集め、実証分析を行った。2013年3月時点で、集めた2010年のデータの中から単位認定を目的としたプログラム留学の実績のある81校(キャンパス)を対象とした。2010年度分のデータには244校の大学があったが、その中で単位認定を目的としたプログラム留学による学生移動の実績のある大学は81校で全体の33.2%だった。ソウル大学は、2014年から学生交流実績データを情報公開サイトに掲載し、2010年のデータは無いため、ソウル大学のホームページから入手ができた2009年のデータを使用した。なお、2010年というやや古いデータを用いた理由は、2011年3月の東日本大震災による原発事故を受けて、一時的に東アジア域内の学生移動に大きな変化が起きたからである。こうした影響が和らいできた新しいデータで検証する必要があるが、すでに手に入られない2010年時点でのデータを分析することが、10年後の比較分析をする時に貴重な手掛かりになると考えられる。

3 大学の属性からみる学生移動総数(Flow)の実態

本節では、大学の属性である大学の規模(在学生数)、地域(立地)、タイプ(韓国の状況によるタイプ分け)によって、実態はどうなっているかを考察した。

3.1 大学の規模と学生異動総数

図1は、プログラム留学による学生移動総数と大学規模との関係を示した散布図である。この二つの変数の相関係数は0.5で、1%水準で有意であった。つまり、プログラム留学による学生移動

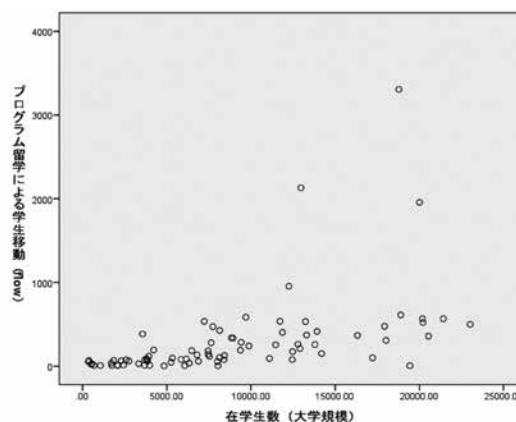


図1 規模からみる学生移動の散布図

総数は、大学規模が大きいほど大きい。大学規模は、ある程度大学の知名度とも関連性があり、プログラム留学による学生移動が大学規模に正比例することも当然な結果かもしれない。しかし、プログラム留学による学生移動総数（Flow）が大きいからその大学では学生移動が盛んに行われ、大学の方針が効いているとはいえない。また、この図で四つの明らかな外れ値があるが、それぞれ延世大学校（3306人）、慶熙大学校（本校）（2130人）、高麗大学校（1957人）、慶熙大学校（国際キャンパス）（954人）である。この四つの大学校以外、プログラム留学による学生移動総数（Flow）は800人以下である。この四つの外れ値を外してみると、変数の相関係数は0.679で、1%水準で有意であり、より強い相関が見られることがわかった。

3.2 地域別に見た学生移動総数

プログラム留学による学生移動はどのような地域で行われているのか、五つの地域にわけて検討した。

表1を見ると、交流実績のある韓国の大学の数は、ソウルのある京畿道で33校あり、全体の41%であり、その他の地域では合わせて48校であり、59%を示している。プログラム留学による学生移動総数は、ソウルのある京畿道に60%強集中し、それ以外の地域に合わせて40%弱である。京畿道の中でもソウルに集中している。しかしながら、先行研究でほとんど注目されてこなかった京畿道以外の地域の実績のある大学の数と学生移動総数（Flow）も想像以上に多いことは重要な発見であり、こうした地方大学の行動に注目する必要性を示している。一校あたりの学生移動総数を見ても、京畿道は425人でもっとも多いが、江原道以外の地域も忠清道が217人、慶尚道が220人、全羅道が156人で、決して少ない人数ではなく、学生移動が必ずしもソウルに集中しているとはいえない。

表1 地域別に見た学生移動の実態

項目	京畿道	江原道	忠清道	慶尚道	全羅道	合計
交流実績のある大学数	33校 (41%)	3校 (4%)	13校 (16%)	19校 (23%)	13校 (16%)	81校 (100%)
プログラム留学による学生移動総数	14040人 (60.5%)	139人 (0.6%)	2817人 (12.1%)	4177人 (18.0%)	2022人 (8.7%)	23195人 (100%)
一校あたりの移動総数	425人	46人	217人	220人	156人	286人

3.3 大学タイプ別に見た学生移動総数

では、プログラム留学による学生移動は大学のタイプによってどのようなのか。本研究では、韓国の大学を三つに分けた。エリートとは、学生移動総数（Flow）が多い延世大学校、慶熙大学校（本校）、高麗大学校、慶熙大学校（国際キャンパス）以外に、韓国のトップのソウル大学である。これらの大学は、韓国のエリート大学として国際的に大きな大学間連携のネットワークを有している。また、ミッション系大学はそもそも国境とは関係なく国際的な繋がりを持ち、大学間連携の国際的なネットワークを利用した学生移動が行われていると考えられるため、独立のグループにした。それ以外の大学をその他にした。このタイプの大学の基本状況は以下の表2である。

エリート大学5校、ミッション系24校、その他52校に分類されたが、学生移動総数をみると、エ

表2 タイプ別にみた学生移動の実態

項目	エリート	ミッション系	その他	合計
大学数	5校	24校	52校	81校
	6%	30%	64%	100%
プログラム留学による学生移動総数	8713人	4405人	10077人	23195人
	38%	19%	43%	100%
1校あたりの移動総数	1743人	184人	194人	286人

リートが8713人で38%、ミッション系が4405人で19%、その他が10077人で43%を占めている。エリート大学は、多くの学生移動が行われているが、その他の大学においてもかなりの学生移動が行われている。1校あたりの移動総数をみても、ミッション系、その他でもそれなりの規模の学生が移動していることが分かる。

4 送り出しと受入れの側面からみる学生移動総数の実態

本節では、その学生移動総数（Flow）の中身、つまり送り出しと受入れの実態を大学の属性にわけて分析をおこなった。

4.1 大学の規模との関係

図2は、プログラム留学による韓国からの送り出しの人数と大学の規模との関係を示した散布図である。大学全体での相関係数は0.589で、1%水準で有意である。その4校の外れ値を除外した相関係数は0.713であり、1%水準で有意である。要するに、大学の規模が大きいほど韓国の大学から他の国の大学への送り出しが多い。

図3は、プログラム留学による他の国の大学から韓国の大学への受入れの人数と大学の規模との関係を示した散布図である。大学全体での相関係数は0.367で、1%水準で有意である。3校の外

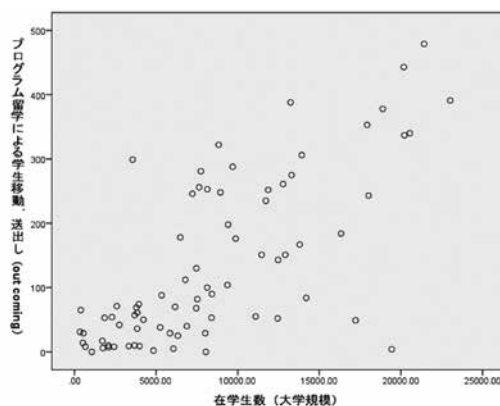


図2 送り出しの散布図

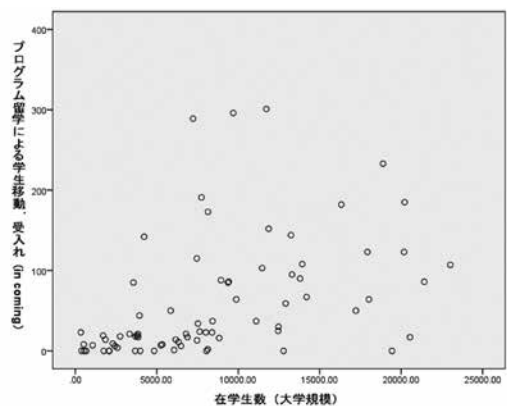


図3 受入れの散布図

(注) いずれもはずれ値を示した大学を除外して図示した。送り出しについては、慶熙大学校（本校）1223人、延世大学校1113人、高麗大学校1062人、慶熙大学校（国際）856人。受入れについては、延世大学校2193人、慶熙大学校（本校）907人、高麗大学校895人。

れ値を除外した相関係数は0.452であり、1%水準で有意である。大学の規模が大きいほど他の国の大学から韓国の大学への受入れが多いが、送り出しに比べると相関係数の数値が小さく、他の国の大学から韓国の大学へ受入れられる際には、大学規模が送り出しほど大きく影響しないと考えられる。

2つの図の縦軸に着目すると、韓国の大学による学生移動は送り出しが多いこともわかる。これは韓国の国レベルの留学生の送り出しが受入れより多いのと同じである。

表3 送り出しと受入れの内訳

	項目	京畿道	江原道	忠清道	慶尚道	全羅道	合計
送り出し	プログラム留学による送り出し数	7787人 (54%)	116人 (0.8%)	1943人 (13%)	3104人 (21%)	1596人 (11%)	14546人 (100%)
	一校あたりの送り出し人数	236人	39人	149人	163人	123人	180人
受け入れ	プログラム留学による受け入れ数	6253人 (71%)	23人 (0.3%)	874人 (10%)	1073人 (12%)	426人 (5%)	8649人 (100%)
	一校あたりの受け入れ数	189人	8人	67人	56人	33人	107人

4.2 地域別に見た実態

表3には、送り出しと受入れの内訳を地域別に示した。まず、送り出しに着目すると、ソウルのある京畿道の大学からは7787人、全体の54%を占めている。江原道では送り出しが116人と少ないが、その他の地域では慶尚道で全体の21%、忠清道で13%、全羅道で11%を占めていることがわかる。他方、受入れの場合、京畿道の大学で6253名と全体の71%を占めており、その他の地域での受入れが少ない傾向がある。送り出しと受入れのバランスをみると、ほぼバランスが取れているのは京畿道のみで、慶尚道、忠清道、全羅道では送り出しが圧倒的に多い。江原道ではどちらも少ないなど、地域差が大きいことが分かる。それは、韓国の地方の大学の知名度が低いからだと考えられる。

4.3 大学タイプとの関係

図4は、プログラム留学による学生移動の送り出しと受入れの状況を大学のタイプ別に示した。エリート大学の場合、バランス型が全体の6割を占めているのに対して、ミッション系大学とその他の大学は送り出しを中心に行われていることがわかる。とくに、その他大学では送り出し率が80%以上である超送り出しの割合が4割も占めており、大学のタイプによって、学生移動の中身が大きく異なっていることが分かる。エリート大学は国際的にネットワークをたくさん有し、対等な関係を作り、プログラムによる学生移動が行われていると考えられる。他方、その他の大学は、大学の知名度が低く、海外の大学と対等な関係が作られてない可能性がうかがえる。そのため、受入れより送り出しを中心にならざるを得ない状況を示していると考えられる。

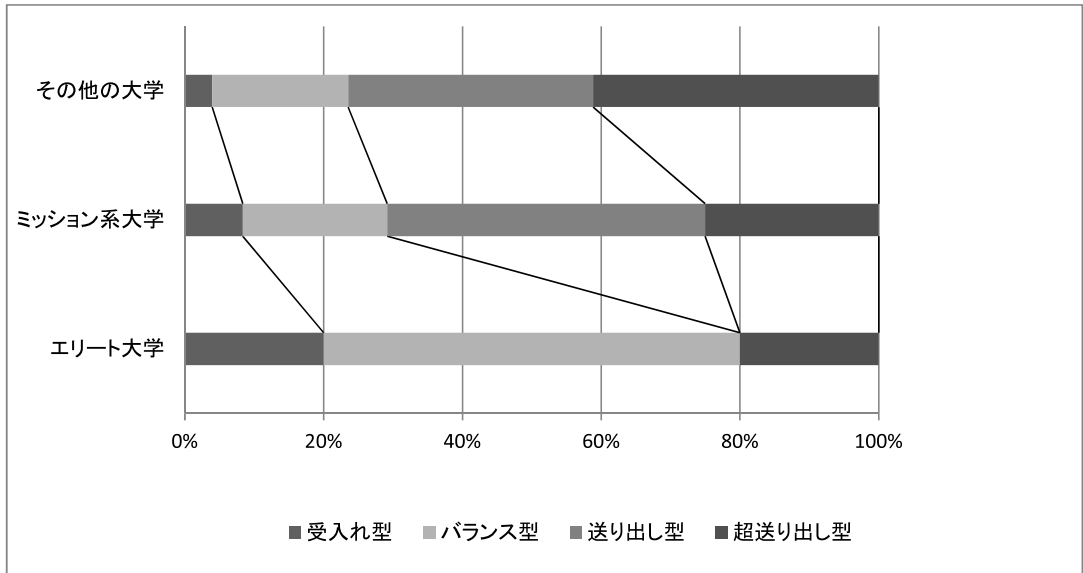


図4 プログラム留学による学生移動の送り出しと受入れの状況

(注) ここでは、「送り出し率=送り出し人数/学生移動総数*100%」で算出して、その割合に応じて、4つの区分に分けた。送り出し率40%未満：受入れ型、40-60%：バランス型、60-80%：送り出し型、80%以上：超送り出し型

5 地域からみる学生移動の実態：域内 or 域外

以上では、韓国の大学におけるプログラム留学による学生移動総数を大学属性別に検討し、大学の規模はプログラム留学による学生移動総数には正の有意を持ち、地域、タイプによってその相違点が明らかになった。では、このようなプログラム留学による学生移動は、東アジア域内と域外でどのような違いがあるのか、大学の属性別に5節で考察した。ここで東アジア域内とは日中韓をさしている。

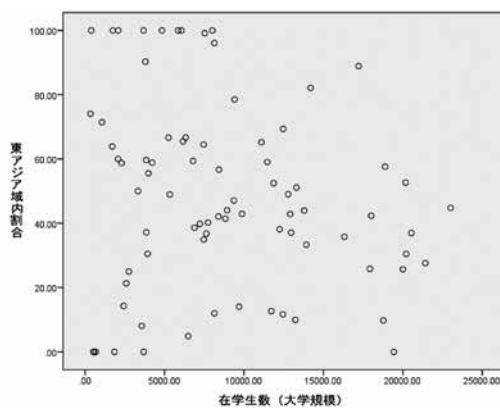


図5 大学規模との相関

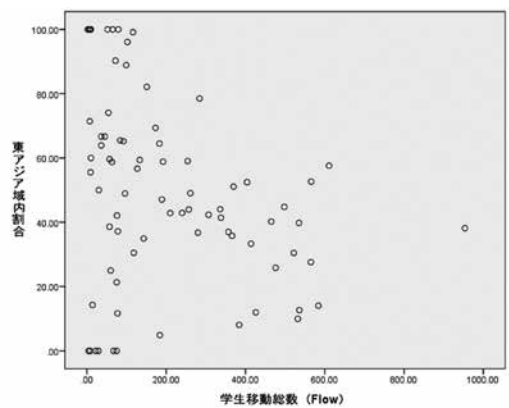


図6 学生移動総数との相関

(注) 図6は外れ値を示した延世大学校、慶熙大学校(本校)高麗大学校を除外して図示している。

5.1 規模との関係

図5には大学規模との、図6には学生移動総数と、域内割合の関係を図示した。大学の規模とは関係が見られないが、学生移動総数との相関係数は -0.304 、1%水準で有意であった。つまり、学生移動総数が少ないほど東アジア域内での交流が多いことがわかる。

5.2 地域との関係

表4 地域別に見た東アジア域内比率

	京畿道	江原道	忠清道	慶尚道	全羅道	合計
域内比率 (%)	27.2%	86.3%	48.7%	46.4%	38.1%	34.6%

地域による東アジア域内比率を見ると(表4)、江原道が86.3%でもっとも高く、その次は忠清道が48.7%、慶尚道が46.4%、全羅道が38.1%であり、ソウルのある京畿道が27.2%でもっとも低かった。要するに、比率からみると、ソウルのある京畿道より、地方のほうが東アジア域内交流が多いことがわかる。

5.3 大学のタイプとの関係

表5 タイプによる東アジア域内比率

項目	エリート大学	ミッション系大学	その他の大学
学生移動総数の東アジア域内率	24.2%	41.8%	40.3%
送出しの東アジア域内率	26.2%	40.7%	36.0%
受入れの東アジア域内率	22.2%	44.0%	51.2%

タイプによる東アジア域内比率を見ると(表5)、エリート大学が24.2%で最も低かった。エリート大学は東アジア域内より、国際的なネットワークを活用しているため、域外でも活発に学生移動が行われていると考えられる。ミッション系大学は41.8%でもっとも高い。ミッション系大学は国際的な繋がりを持っているため、東アジア域外での学生移動が多いと想定したが、やはり東アジア域内での学生移動がメインであった。その他の大学は40.3%であり、そもそも国際的なネットワークが少なく、想定と同じく東アジア域内での学生移動が多いと考えられる。送り出しと受入れ別に見た場合、基本的には似たような傾向であったが、その他の大学は域内で受入れが送り出しより多かった。

6 韓国の大学における相手大学との交流パターンからみる学生移動の実態

最後に、東アジア域内で韓国大学と交流している中国、日本の相手大学数、学生移動総数(Flow)のデータを使用して交流パターンを検討した。

図7は1校あたりの学生移動の数と実績大学数との関係を示した散布図である。有意な相関は見

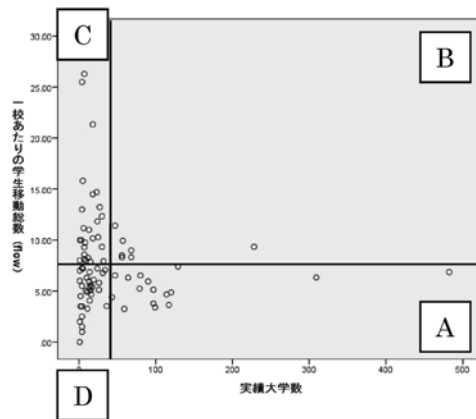


図7 1校あたりの学生移動の数と実績大学数との関係を示した散布図

- ※Aパターン：実績大学数>41、1大学あたりの学生移動数<8
 Bパターン：実績大学数>41、1大学あたりの学生移動数>8
 Cパターン：実績大学数<41、1大学あたりの学生移動数≥8
 Dパターン：実績大学数<41、1大学あたりの学生移動数<8

表6 大学規模、タイプと学生移動パターンとのカイニ乗検定 (χ^2 検定) と相関係数

項目	Aパターン	Bパターン	Cパターン	Dパターン
大学規模	0.013 (0.327**)	0.010 (0.374**)	0.222 (-0.185)	0.049 (-0.271*)
大学のタイプ	0.002 (-0.322**)	0.475 (-0.004)	0.310 (0.137)	0.144 (0.135)

(注) () 内の数値は相関係数である。

られなかったため、平均値をとって四つのパターンに分けてみた。実績大学数の平均値は41校で、1校あたりの学生移動数の平均値は8人である。

そして、学生移動パターン別と大学規模、大学のタイプとの相関係数、 χ^2 検定を行い、分析した。表6が、大学規模、大学のタイプがそれぞれ学生移動パターンとの χ^2 検定の結果である。Aパターン、Bパターン、Dパターンは大学規模と5%水準で有意である。そして、Aパターンと大学のタイプは1%水準で有意である。学生移動パターン別による学生移動は、大学のタイプより大学規模との関連性が強いと考えられる。要するに、BパターンとDパターンは、大学規模と強い相関を持ち、独立性をもっていない。しかし、大学のタイプとは関連性が低く、独立性を持っている。Aパターンは、大学規模、大学のタイプ両方と強い相関があり、独立性を持ってない。Cパターンの大学は大学規模、大学のタイプ両方と相関が見られず、独立性を持っている。

Aパターンの大学は、大学規模と大学のタイプによって、学生移動の戦略が決まっている可能性が高い。BパターンとDパターンの大学は、大学のタイプとは関係なく、大学の規模によって学生移動の戦略が決まっていると考えられる。Cパターンの大学は、大学によってことなる学生移動の戦略を取っていると考えられる。

変数の独立性を検証する分析を踏まえ、その詳細をみると表7のとおりである。学生移動パター

表7 大学規模*タイプ別にみた学生移動の交流パターンの詳細(大学数、単位:校)

項目	詳細	Aパターン	Bパターン	Cパターン	Dパターン	全体
大学規模別	5000人未満	1	0	10	15	26
	5000人～1万人未満	5	1	9	12	27
	1万人～	10	6	5	7	28
	合計	16	7	24	34	81
大学のタイプ別	エリート大学	4	1	0	0	5
	ミッション系大学	5	1	7	11	24
	その他の大学	7	5	17	23	52
	合計	16	7	24	34	81

ン別の大学数は、それぞれ、16校、7校、24校、34校である。この四つの学生移動のパターンによって大学では異なる方針を持っていると考えられる。AパターンとBパターンは、多くの大学と学生移動が行われ、分散型で学生移動が行われている行動パターンである。CパターンとDパターンは、少ない大学と学生移動が行われ、集中型で学生移動が行われている行動パターンである。大学の規模別に見た場合(表7)、Aパターンには、1万人以上の大規模大学が10校で、もっとも多かった。1万人以下の中小規模の大学は、CパターンとDパターンにもっとも多かった。大学タイプ別にみると、エリート大学では多くの大学に少ない人数を移動させるAパターンが多いが、ミッション系、その他では交流大学数も1大学あたりの移動人数も少ないDパターンが最も多い。

四つのパターンの大学はそれぞれ学生移動の戦略や国際化のステージが異なると考えられる。Aパターンの大学には、交流大学を増やすことで学生交流を増やす戦略だと考えられる。多くの大学を相手に、1大学あたり多くの人数を移動させるBパターンの大学に属する大学の数はそもそも少ない。中小規模の大学ではこのパターンは難しいことが分かるが、必ずしもエリート大学だけでなく、その他の大学でもこうした国際化が進んだ大学が存在していることが分かる。Cパターンは相手大学の数は少ないが、1大学あたりに多くの学生を送る戦略をとっていると考えられる。Dパターンの大学は、交流数も、1大学あたりの学生も少なく、国際化に力を入れ始めた段階の大学がここに入ると思われる。

7 まとめ

本稿では、プログラム留学による学生移動の実態を大学の属性を軸に分析を行い、韓国の大学の学生移動の実態、また相手大学との交流パターンを明らかにした。具体的に明らかになったものは以下のようなものである。

第一に、プログラム留学による学生移動総数と大学の規模、地域、大学タイプとの関係を探ったが、先行研究で指摘されてこなかった地方(ソウルのある京畿道以外の地域)、あるいはエリート大学やミッション系大学以外の大学においても、一部において、学生移動が熱心に行われることを明らかにした点である。

第二に、学生移動の中身、すなわち送り出しと受入れの関係の分析からは、韓国の正規留学生の

傾向と同様に、プログラム留学においても送り出しの比重が高いことがわかった。エリート大学では、送り出しと受入れのバランスが取れているケースが多かったが、それ以外のタイプの大学で送り出しの比重がきわめて高いことを明らかにした。

第三は、プログラム留学における域内交流の役割である。学生移動総数が少ないほど、日中という域内での交流の割合が大きいことを明らかにした。学生の国際交流という裾野を広げていく際に、域内交流が果たす役割が大きいことを示唆した結果であった。

第四は、学生移動のパターンという、大学の国際化に関する戦略やステージの違いを分析する視点を打ち出した点である。韓国の大学の分析から、1大学あたりの交流数は一定範囲に保ち、交流機関数を増やすパターン（Aパターン）と交流大学の数は限られているが、その大学と多くの学生をやり取りするパターン（Cパターン）、両者を組み合わせたBパターンがあることがわかった。

そうした交流パターンの違いは必ずしも、大学の規模や大学タイプによって十分に説明されておらず、こうした違いがどのような異なる戦略によるのかを事例研究から明らかにしていくことも今後の課題として重要である。そして、データの制約上、学部構成まで分析できなかったが、この部分も今後の課題として残されている。

【参考文献】

Everett S. Lee 1966, *A Theory of Migration*, Springer. pp.47-57

深堀聡子 2014 『AHELO調査結果の分析に関する研究会』 国立教育政策研究所

フリヤ・ゴンサレス/ローベルト・ワーヘナール（編著）深堀聡子/竹中享（訳）『欧州教育制度のチューニング：ボローニャ・プロセスへの大学の貢献』 明石書店

許仁義 1997 「大学の国際交流現況と活性化法案— 江原大学校の事例を中心に—」 修士論文

韓国教育開発院調査報告書 2004 『高等教育国際化指標及び指数開発研究』 韓国教育開発院

黒田一雄 2011 「東アジアにおける高等教育の地域的枠組みの形成と日本」 *メディア教育研究* 第8巻 第1号 *Journal of Multimedia Education Research* 2011, Vol.8, No.1, S22-S32

韓国教育開発院調査報告書 2012 『大学の外国人留学生管理及び支援体制強化法案研究』 韓国教育開発院

北村友人 2016 「高等教育の国際化と域内連携」 *IDE現代の高等教育* No.577 『2020年への展望』 2016年1月号, pp.48-53

Mazzarol, T. 2001, "Push-Pull Factors Influencing International Student Destination Choice" CEMI Discussion Paper Series, DP 0105, Centre for Entrepreneurial Management and Innovation, www.cemi.com.au

Jenny J. Lee, Alma Maldonado-Maldonado, and Gary Rhoades 2006, "The Political Economy of International Student Flows: Patterns, Ideas, and Propositions", J.C. Smart(ed.), *Higher Education: Handbook of Theory and Research*, Vol.XXI, pp.545-590

両角亜希子 2011 「大学のグローバル人材育成はどこまで進んでいるか」 *リクルートカレッジマネ*

ジメント168/May・Jun.2011, pp.14-23

OECD iLibrary Education at a Glance 2015, OECD Indicators C4 Tables http://www.oecd-ilibrary.org/education/education-at-a-glance-2015/indicator-c4-tables_eag-2015-table211-en
2016年1月27日最終接続

朴恵辰 1997 「情報化時代大学教育国際化に関する研究—学生交流を中心に—」 修士論文

杉村美紀・黒田一雄 2009 『アジアにおける地域連携フレームワークと大学間連携事例の検証』 文部科学省平成20年度国際開発協力サポートセンター・プロジェクト

杉村美紀 2011 『アジア・オセアニアにおける留学生移動と教育のポータレス化に関する実証的比較研究』 科学研究費補助金（基板研究（B）海外学術調査）研究成果報告書

嶋内佐絵 2016 『東アジアにおける留学生移動のパラダイムの転換』—大学国際化と「英語プログラム」の日韓比較—

張燕 2012 「『留学交流』の事例分析からみた日本の大学におけるプログラム留学—単位認定プログラムを中心として—」 東京大学大学院研究紀要 第52巻, pp.317-326